

マラヤ新石器時代テンクレンブ遺跡の土器

川名 広文

1. はじめに

岩陰遺跡の文化層は既に乱されていた（図1）。半島マレーシア（旧称マラヤ）の西北部、タイと国境を接するペルリス州の山間に所在するブキット＝テンクレンブ（Bukit Tengku Lembu）^(山)遺跡は、依然英国影響下にあった1951年にマラヤ連邦博物館副館長ウィリアムズ・ハントらの踏査により発見された〔Williams-Hunt 1952〕。

その略報に依れば、この長大な岩陰は一段高いテラスと二つの入口を開けた洞窟を擁している。だが、グアノ採掘の難を被り、往時の遺物包含層は攪乱され層位や共伴関係がおおよそ不明となっていた。そうしたなか、掘り出された出土遺物が館職員らによって大概採取されたのはせめてもの救いであった。

そこでは中石器時代の石器のほか、新石器時代に属する土器（多量）、磨製石斧（数点）、砥石（1点）、石環（腕輪／1点）、埋葬人骨（3体以上）および双方時期の自然遺物（貝殻、獣骨）などが確認されている。そのうち埋葬の証跡は成人2体と幼年（8歳前後）1体で、テラスの範囲でみつまっている。そして、長さ34.5cm幅8cm弱に及ぶ、マラヤで知られるうちで最も長大な磨製石斧も特筆される。さらに驚くべき資料として、ギリシャ起源とされる土器2個体が早くに認識され、その鑑定所見が寄せられていた。

そのあと急逝したW. ハントによる踏査略報の公表10年後に、かのグアチャ（Gua Cha）遺跡を発掘し報告した実績をもつG. シーヴィキング（帰朝後大英博物館に所属）によって、当遺跡で採取されていたおもに人工遺物についての詳報が公刊された〔Sieveking 1962〕。

略完形・復元土器だけで94個体にのぼり、破片は夥しい数に及ぶ。

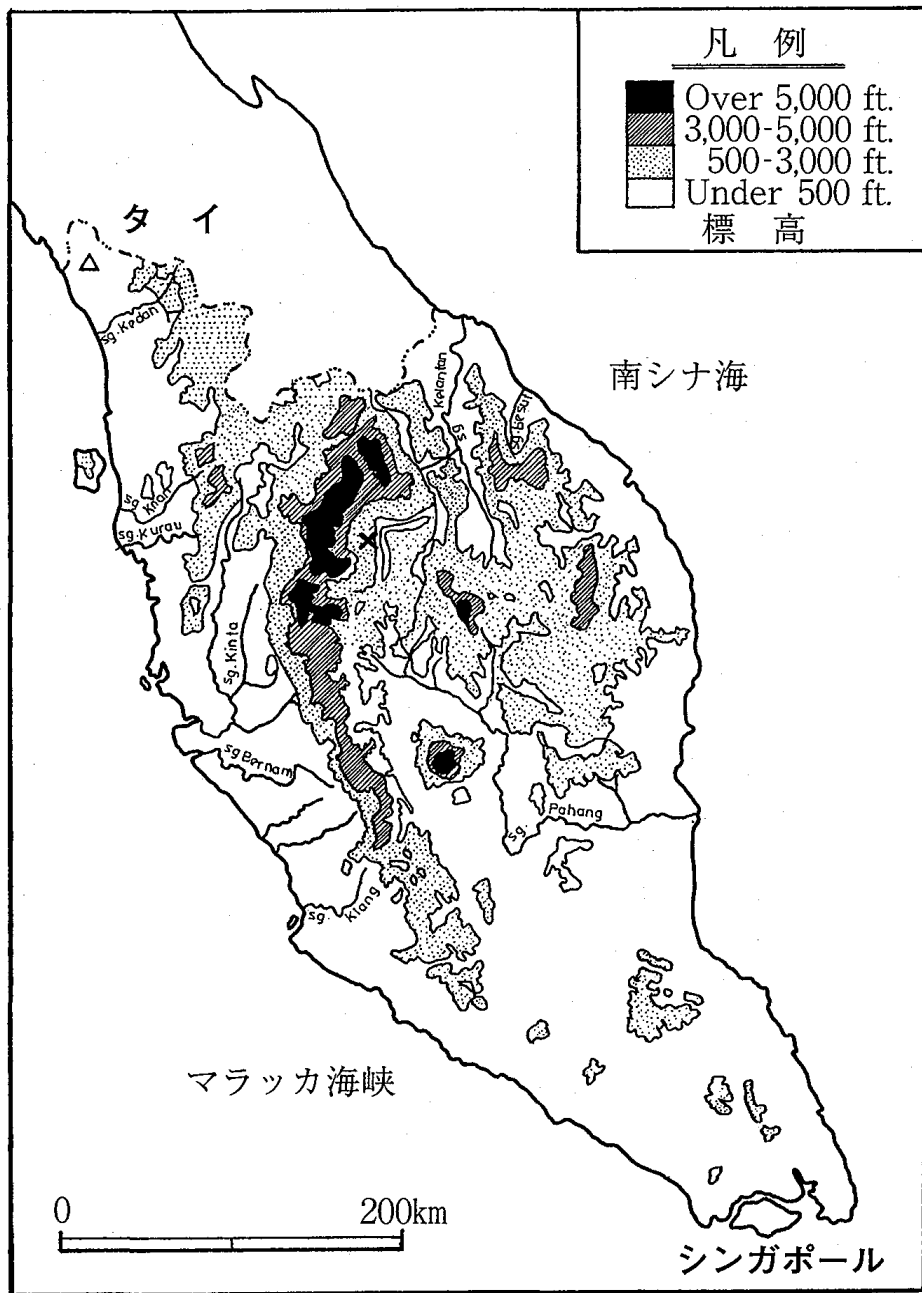


図1 半島マレーシアの地形図と参照遺跡の位置
(△：テンクレンブ遺跡、×：グアチャ遺跡)

2. 出土土器について

(1) 搬入土器

先の外来の標品が大英博物館に送られ、古代ギリシャ・ローマ部門の P. E. Corbett から所見がもたらされた [Williams-Hunt 1952 : 187-88]。それに依れば、ポット形土器の外面にみられる釉薬や硬い器壁は、古代アッ

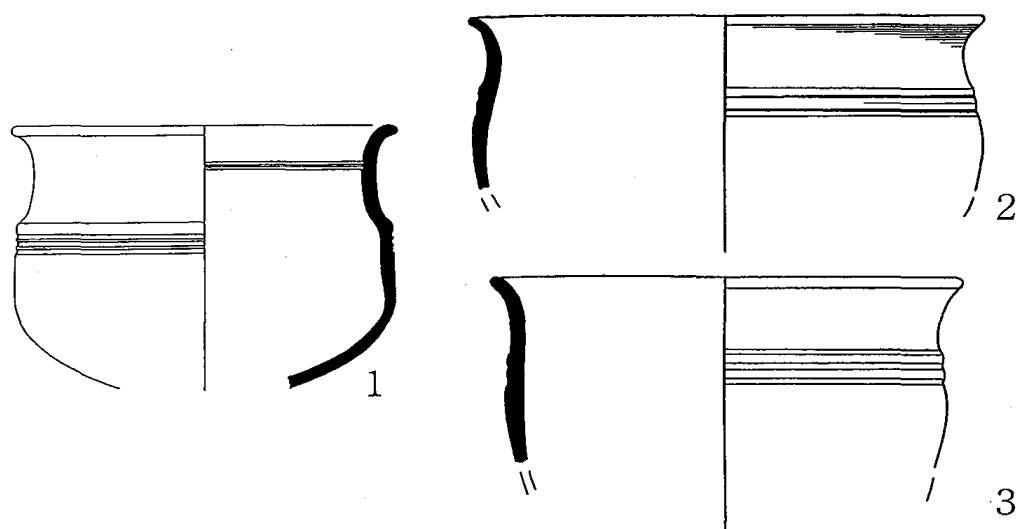


図2 搬入土器(1)とRupar遺跡出土の北インド黒色磨研土器(2, 3)-1/3

ティカの黒色施釉土器の特徴をよく示しているとされた。

古典ギリシャに由来し紀元前4～5世紀の所産とされた薄手硬質の黒色磨研土器は、その後アテネ米国学院のH. Thompson教授らにより器形復元され、カップ形を呈する小型容器であることが明らかになった(図2-1)。比較類品を引いて彼らもまた同じく、前4世紀後葉のギリシャ産黒色施釉陶器に極めて類似するという認識を示した。

こうした見解に対して著者G. シーヴィキングは異説を提起する。器壁が比して厚く、高温焼成ではなく、形態にも類例がみられず、またその勢力圏も中国北東部に限られている事などから、さしあたり龍山文化(前2千年紀)の黒陶との類似性は乏しいとみる。むしろ前3～6世紀頃に比定される「北印黒色磨研土器」や前1世紀に下る当地の遺跡出土例(TaxilaのBhir遺丘)に近似する向きが示された。それはインド北部と古代ギリシャの土器が類似した製作技法を用いていたことに帰着し、具体的には焼成の諸条件や焼成温度における共通性を示している。そして、北印黒色磨研土器の中に、テンクレンプ遺跡のポット形容器と同様な器形と平行沈線文を具えたカップ形容器がみられる事を指摘した(図2-2, 3)。

実測図に見るように両者の黒色磨研土器のデザインは同一に近く、さ

らに胎土や混和剤もかなり近似することから、テンクレンブ遺跡の搬入品は北印黒色磨研土器に帰属すると説く。その分布はデリーの北西に位置するルパール（Rupar）遺跡周辺から、ほぼガンジス川河口域に至る広大な範囲に及んでいる。

さらに、しばらく経った1979年に刊行され画期をなした英文論集“初期東南アジア”所収のB. ブロンソン「中部タイの先史後期と有史初期」が、当該搬入土器のルーツについて新知見を投げかけた。すなわち、それが紀元後1～2世紀の時期に実際に南インドないしはセイロン島から招来されたものである事はほとんど疑いない。類例として、タミール・ナデュ地方に位置するアリカメデュ（Arikamedu）遺跡の<18c型>やセイロン島アヌラダブラ近郊に所在するゲディゲ（Gedige）遺跡下層の<17ei型>などが知られる^{*1} [Bronson 1979 : 330]。

したがって新石器時代かその直後の時期に、マレー半島の集団にそのような遠方の外来土器が搬入された可能性が強まり、彼の地とのなんらかの交流ないしは連鎖的移入を窺わせるとともに、時間的傾斜を考慮しながらも年代交差を行なううえで依然注目されていく資料になろう。

（2）在地土器の概観

以下、まずは上掲 [Sieveking 1962 : 27-28] の報文に従って関係する要所を記述しておきたい。

1954年になされたテンクレンブ遺跡収集土器の整理復元の過程で、既にはかのマラヤ新石器時代の諸遺跡から知られていた多くの類型に加えて、まったく新しい6つの器種・類型が認識された。その確実性は量的な面と様式的処方²の均一性の両者によって強まる。

事実上、収集品は二大別される。すなわち、一方は少量だが単純な形態をなす食器で、丸底、開かない口縁部、器表全面の縄目押捺などが特徴になる。他方は多量にして、口縁が相当外反した深鉢や容器で、ほかの特殊な類型も含み、平底、円錐状の器形、朝顔状に開いた口縁部といった形態要素で認識され、また局所的な縄目押捺の加飾において互いに関係性を有する。そして、前者はマラヤ新石器時代に通有な土器とみなされようが、かたや後者はケラントアン州の諸遺跡で見つかっている脚台付

鉢や線状装飾文に似通った地域的发展の様相に違いない。

当岩陰遺跡の遺物包含層の諸相は、ケラントアン州のグアチャ遺跡^{*2}やペラ州のグアケルバウ^{*3}（Gua Kerbau）遺跡とも類似している。完形品ばかりでなく新石器時代に属する多量の土器片が認められるので、グアチャ遺跡と同様に、完形土器や磨製石器が副葬された多くの葬墓とともに、該期の居住生活層をも包含していた蓋然性が高い。平均すれば、グアチャ遺跡における新石器時代埋葬では1基あたり6～7個の土器が副えられていた。そこでこれまでに検出された完形土器の個数から推断すると、このテンクレンプ岩陰には多分12～20基の埋葬が存在していたことになる^{*4}。

（3）器種・類型

収集された新石器時代の在地土器について、二群に大別し都合9の器種に分類して記載している〔Sieveking 1962：28-46〕。

多量の土器片の大半を占めるのは、1951年に遺跡が発見された後、グアノ採掘に起因し結果破損した容器類である。器形復元を可能とするのに足る土器片が必ずしも遺存するとは限らないけれども、入念な観察により大方の場合で本来の器形が認識されうる。ちなみに、往時からの破損を示す残欠は収集品のなかにあって数少ない。

土器片はかなり均一な胎土と器厚を有し、その色調はおそらく焼成のせいで暗褐色から灰黒色にまでわたるが、容器全種の多様さの範囲にあってすべての点で一致をみる。

B. ピーコックによる後記の類別（TL～種）やグアチャ出土土器の分類（GC～種）〔Peacock 1959：125-35、川名 2006〕と対照させながら列挙する。なお、TL＝テンクレンプ遺跡、GC＝グアチャ遺跡を示すそれぞれ略記として用いる。

<第1群 通有な先史土器>

TL①型 半球形碗（図3：①）

平滑で真直ぐに立つ口縁を有する。8点の完形品があり、器高は51～76mm、口径は178～254mmを測る。

口縁端部を除いて器表面に縄目の装飾がある。

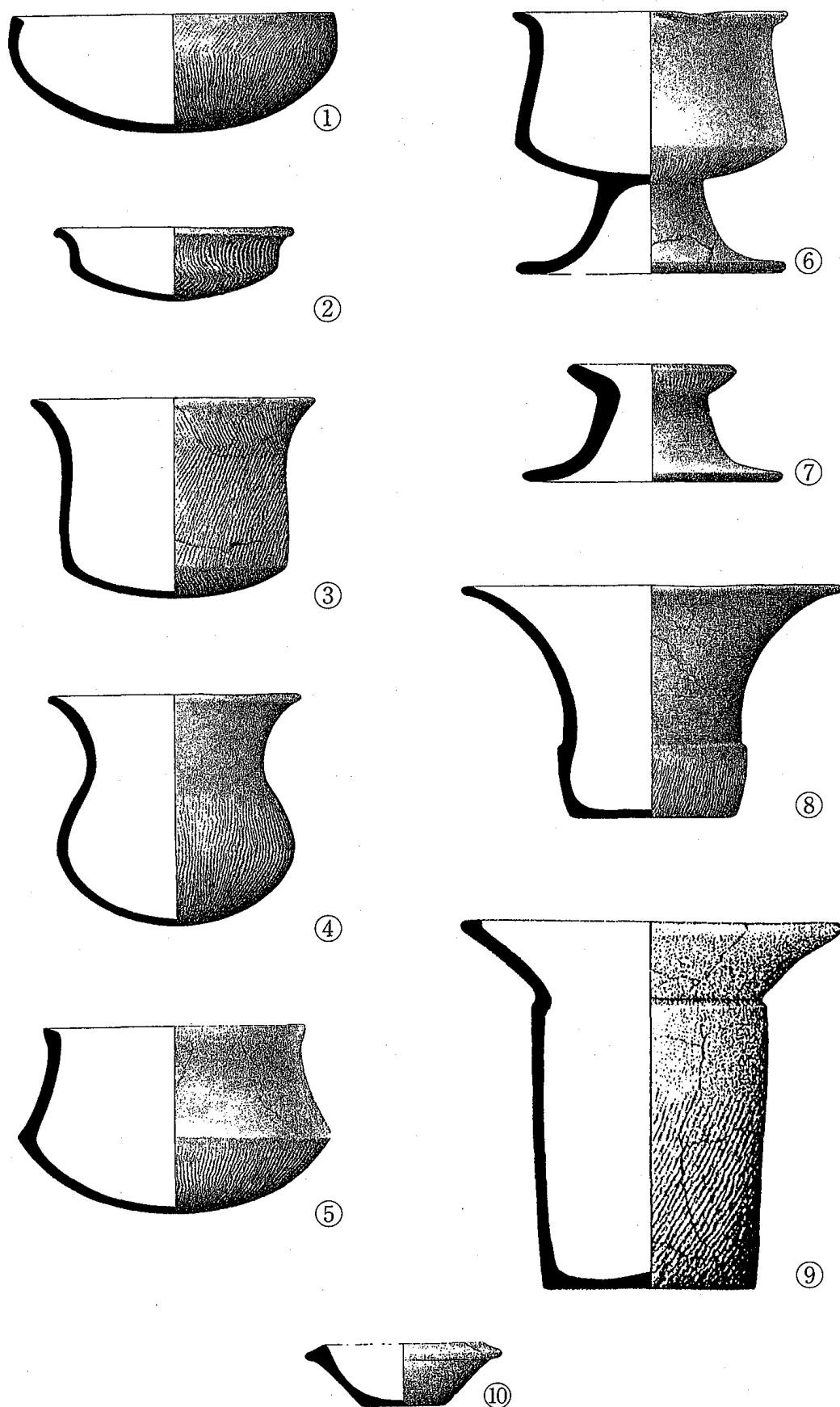


図3 テンクレンプ遺跡出土土器(TL①型～⑨型、⑩)-1/6

TL 8 種 i, j に該当する。また GC 5 種に比定される。

TL②型 折返し口縁を有す半球形碗 (図 3 : ②)

3 点の標品で器高は 64~152mm と様々だが、開いた平縁の端部を除いて器表面に縄目の装飾がある。

TL 8 種 g に該当する。

TL③型 開き口縁の鉢 (図 3 : ③)

9 点の標品をみる。縄目押捺の装飾が時々は頸部にまで伸びるが、大概は平滑な無文の頸部をもつため、新旧デザインのうえで中間的なタイプ。丸みを帯びた底部の近くに稜をつける。この容器は法量が非常に均一である。

TL 6 種 b に該当する。また GC 6 種に近似する。

TL④型 括れた頸部を具えた球根形容器 (図 3 : ④)

4 点の標品がある。新旧デザインの間中間的なタイプとみられる。長い頸部を全くの無文にして、球根形の体部は縄目押捺で装飾する。丸底。

TL 6 種 a に該当する。また GC 8 種 b に近似する。

<第 2 群 発展した新石器時代土器>

TL⑤型 稜をもつ鉢 (図 3 : ⑤)

12 点の標品がある。デザインは形式化し感じよい。縄目押捺された半球状の底部の上に稜を介して高い無地の頸部が乗り、平滑で角ばった口縁部は折返し気味となる。

整形には金属の影響を窺わせる。器高は同じだが口径が幾分広い (216-28mm) 部類が 1~2 点あるものの、大半は器高 127mm、口径 165mm 前後である。また、小型品も 1 例みる (図 5 : h)。大半は TL 5 種に該当するが、[Sieveking 1962 : Fig. 5] 上段の小型品は TL 8 種 h に該当する。また総じて GC 3 種 j に近似する。

TL⑥型 台付ビーカー (図 3 : ⑥)

10 点の標品がある。当該デザインは稜をもつ鉢 (⑤型) と末広がりの器台 (後述⑦型) とを結合させたものと思われる。

大きさに規格性があり、器高は190-203mmに収まり、口径は165-178mmにわたる。

TL 4 種に該当する。

TL⑦型 器 台 (図3 : ⑦)

末広がりの器台。17点の標品がある。グアチャ遺跡でも同型1例が10号墓の南東80cm付近で出土している [Sieveking 1956 : Fig. 4]。縄目押捺は括れの上側より台部周縁にかけて施される。内部は中空。TL 7 種に該当する。

TL⑧型 膨らんだ胴部を具えた鐘形深鉢 (図3 : ⑧)

大型の部類が16点、小型 (⑧) が3点ある。平底をなし縄目押捺された円筒形の胴部に極めて長く開いた頸・口縁部が乗るデザインをとる。

器高は大型が203-228mmの間、小型が152mm程であり、口径は双方にあって254-305mmにわたる。

TL 1 種に該当する。

TL⑨型 円筒形の胴部をもつ鐘形深鉢 (図3 : ⑨)

大型の部類が4点、小型が2点ある。大型は器高が平均で241mm、最大径が254-79mmに及び、一方小型は器高が114-165mm、口径が203-28mmである。

円筒形の胴部には底面からおよそ半分ないし2/3の範囲で縄目押捺が施される。

TL 2 種に該当する。

その他に容器3例について、記載がなされている。うち2点は稜を挟んで上下に縄目押捺を施しており、TL⑤型の変種とみられるが、遺存状況が充分でない。残る1例は図3 - ⑩に当る無文の平底小鉢で、口径131mm、器高44mmの寸法をもつ。同じく厚手の新石器時代風の器壁で製作されている。多分TL 8 種kに該当し、片や蓋と推察されている。

なお、初期金属器時代に属するとみられる容器片も出土しており、これらの素地土は新石器時代のものよりも粒子が細かい [同前 : 46]。

相前後するかたちで、B. ピーコックは“マラヤ先史時代の土器概観”

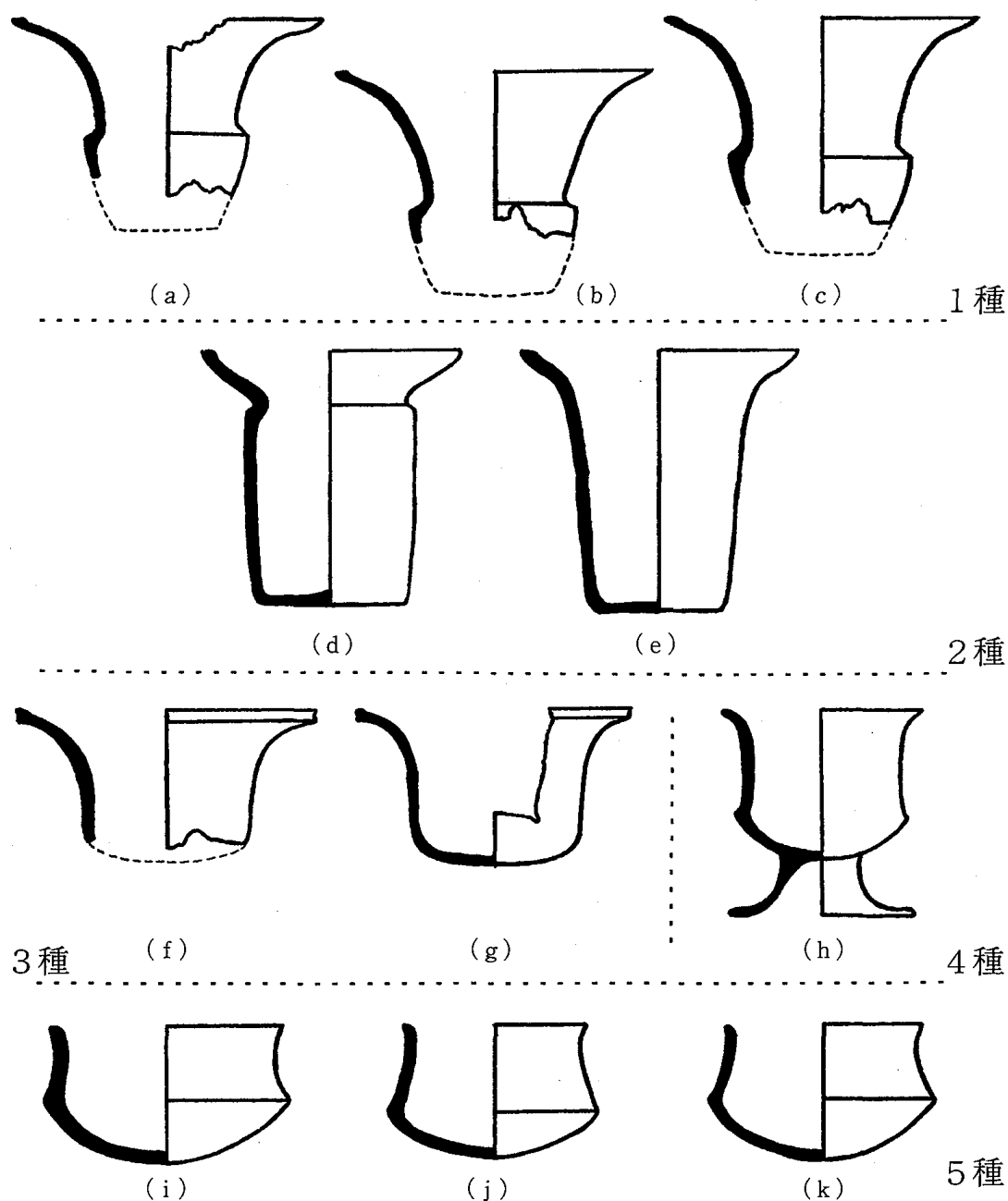


図4 テンクレンブ遺跡出土土器の分類(TL 1種～5種)-1/8

において、テンクレンブ出土土器を検討し都合8種（原著 i～viii）余の器種に分類している [Peacock 1959 : 141-45]。以下、両者の実測図を基に補足しながら列記していく。

TL 1種 トランペット形深鉢（図4：a, b, c）

黒斑を有し暗赤褐色。稜線以下の胴部に縄目、開く口唇部に磨きを施す。

- TL2種 円筒形深鉢（図4：d, e）
黒斑を有し暗赤褐色。胴下半に縄目、口縁部に磨きを施す。
- TL3種 広口鉢（図4：f, g）
暗赤褐色。体部に縄目、口縁部に磨きを施す。
- TL4種 台付杯（図4：h）／ゴブリット
黒斑を有し暗赤褐色。体部下半に縄目、残りに磨きを施す。
- TL5種 双円錐形壺（図4：i, j, k）
暗赤褐色。体部下半に縄目、上半に磨きを施す。
- TL6種 丸底容器（図5：a, b, c）
暗赤褐色。体部に縄目を施す。
- TL7種 括れ器台（図5：d, e, f）
暗赤褐色。無文で磨きを施す。
- TL8種 種々雑多（図5：g～k）
g, h：丸底で折返し口縁を有す容器。
暗赤褐色。体部に縄目、口縁部に磨きを施す。
i, j：丸底碗
暗赤褐色。縄目を施す。
k：蓋か。明褐色で無文。

（4）対比検討

如上の二者による分類を対照させ、さらにグアチャ遺跡出土土器の類別 [Peacock 1959：125-35、川名 2006] と対比させながら若干の検討を加えたい。

TL①型＝TL8種 i, j はGC5種に比定される。

TL②型＝TL8種 g はGC5種 1 に近似するものの、口唇部の折返しが新たな特徴となる。ちなみに、グアチャ遺跡1979年再調査出土の土器片の口縁部断面形態 [川名 2006：図11] の中に類例が認められる。

TL③型＝TL6種 b はGC6種に近似するが、底部近くの稜とこれを介した縄目押捺の向きが新たな特徴と言える。

TL④型＝TL6種 a はGC8種 b （グアチャ遺跡8号墓のビーカー形容器 [Sieveking 1956：Fig.12-No.4]、[川名 2006：図10右足首上]）に近似

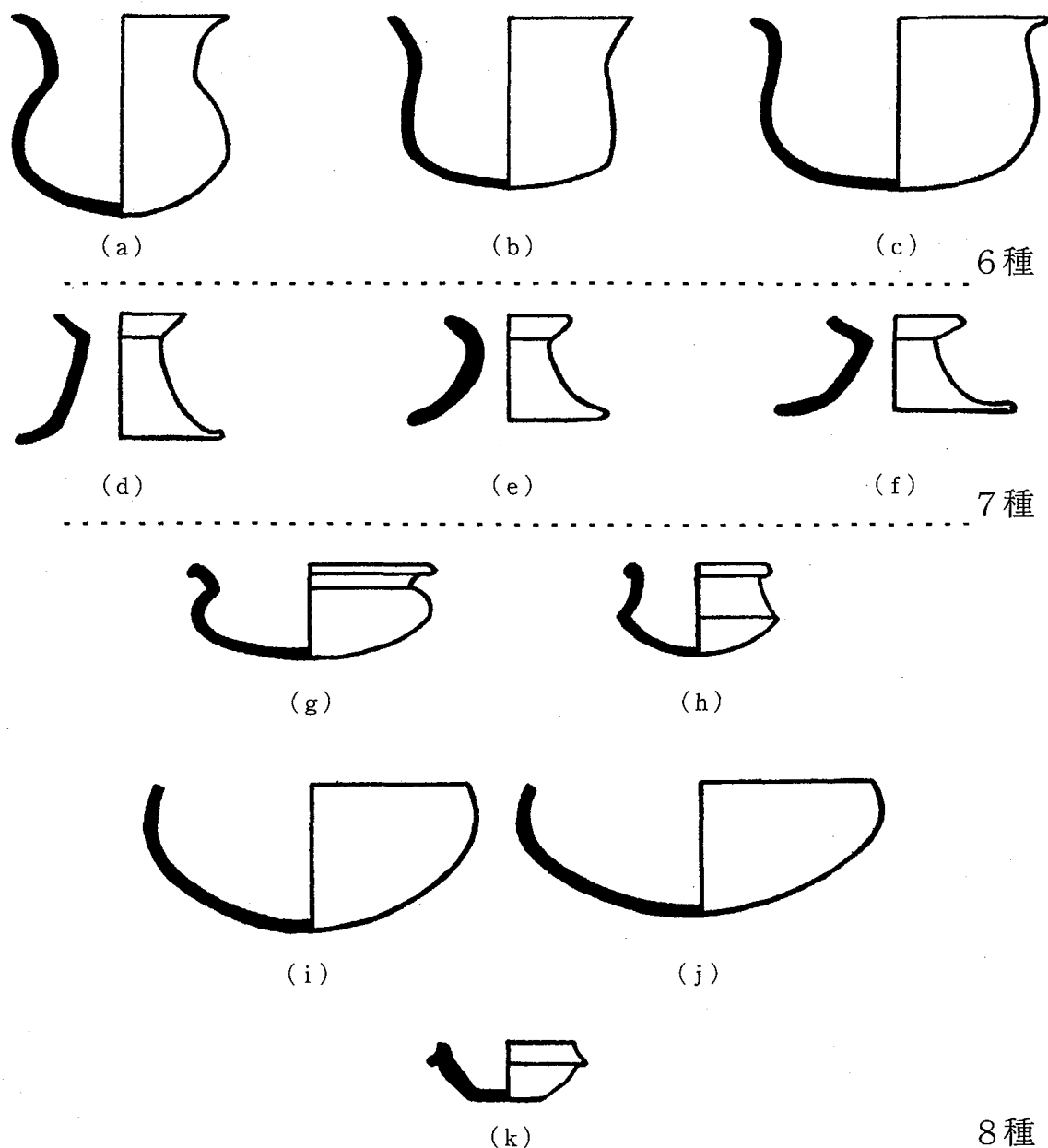


図5 テンクレンブ遺跡出土土器の分類(TL 6種～8種)-1/8

するが、法量が一回り大きく口径に対する器高の比率を増している。

TL⑤型=TL 5種はGC 3種 j に祖形を辿ることができ、グアチャ遺跡 2号墓の土器 [Sieveking 1956 : Fig. 8-No. 6] に代表されるように、まだ口径144mm、器高102mmと一回り小振りで平底を呈し、口縁部の括れが比してつよい。^{*5}なお、実測図 [Sieveking 1962 : Fig. 5, 6] のある当該6例のうち、Fig. 5 上段の土器は大方の同型標品に比べ法量も小さい（口径

110、器高67mm) うえまだ平底気味で、口縁部の反り具合も上記グアチャ遺跡2号墓土器により類似する。

こうした稜をもつ鉢のデザインは、ベトナム中部のサーフィン (Sa-Huynh) 遺跡や同じペルリス州にある鉄器時代の遺跡であるブキットチューピング (Bukit Chupig) にも並行しているという [Sieveking 1962 : 33]。

TL⑥型=TL4種はGC1種1類cとGC1種2類d双方の系譜をひくとみられ、身(体部)がすぼまりながら反りを帯び、縄目押捺の範囲も体部下半に限定されてくる。器高も16cm程から20cm前後へ増し、身の法量が一回り大きくなっている。当遺跡出土6点の実測図をみると、身の深さに対して口径が約1.25倍～1.84倍にわたるヴァリエーション(横長度合い)が認められるが、それが年代の変遷かそれとも同時併存かはまだ分からない(図6)。

TL⑦型=TL7種はGC9種2類に比定される。デザインの上ではベトナムに所在する青銅器時代ドンソン (Dong-Son) 遺跡出土の器台に並行するかもしれないとみる向きがある [Sieveking 1962 : 41]。

TL⑧型=TL1種はGC8種aの器形を祖形としながら、さらに口縁の外反を極め胴部に稜線を設けるに至った類型と目される。なお、中国初期王朝の青銅器と並行性を有し、それから発展したものかもしれないとする所見もある [Sieveking 1962 : 41]。

TL⑨型=TL2種は大小の部類とともに、区画凹線の有無でも変異がある。このうち、開く口縁部と円筒形の胴部との境に明確な凹線を設けるTL2種dの方は大型に限られるようである。TL⑨型はデザインにおいてTL⑧型と明らかに共存するとみる見解がある [Sieveking 1962 : 41]。グアチャ遺跡では製作されなかった新たな器種である。

なお、B. ピーコックが類別したTL3種(広口鉢)とTL6種cについては他方に記載がみられない。そのTL3種はグアチャ遺跡に判然とは認められない類型とみることができる。またTL6種cはGC6種cに対比でき口縁部の屈曲具合が幾分異なるものの、器形や大きさ、縄目押捺の部位などは近似する。

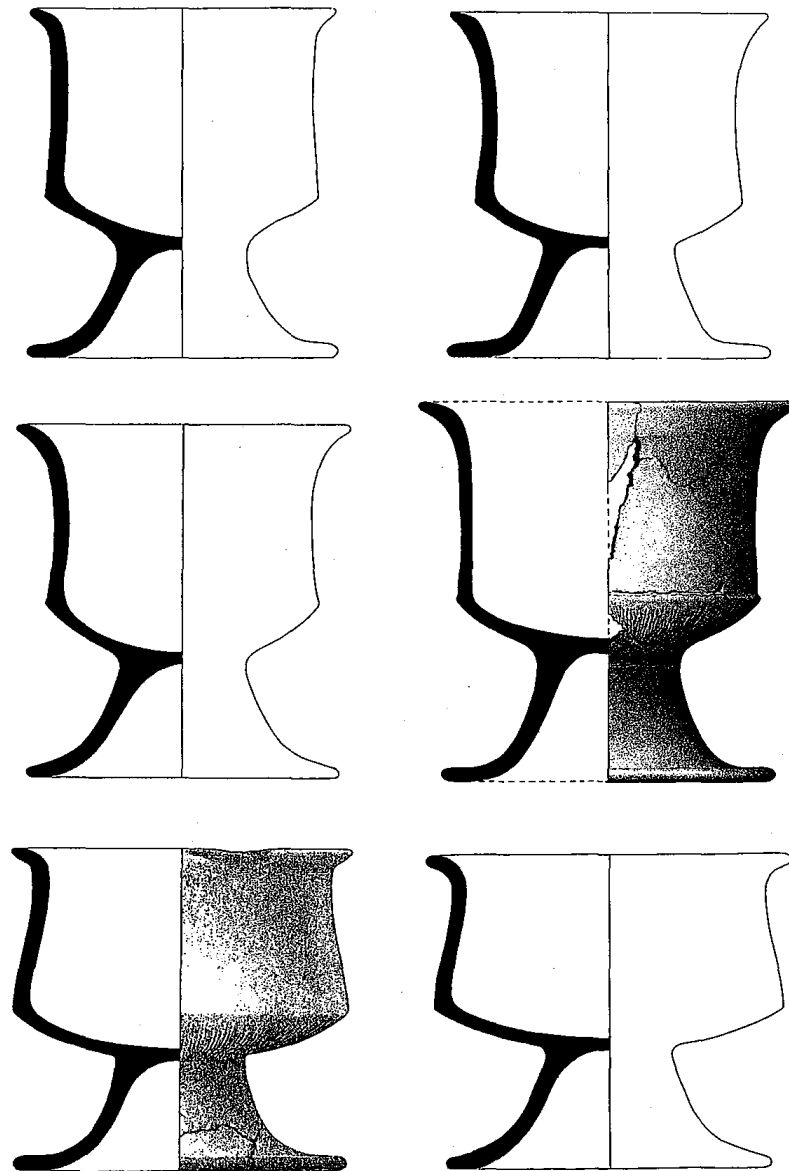


図6 テンクレンプ遺跡出土土器TL⑥型=TL4種-1/6

ちなみにB. ピーコックは、縄目押捺を装飾というより、すべりをとめて土器をしっかり持ちうることに目的があると述べている [Peacock 1959、小林 1970:176]。押捺範囲が掌でもつ部位に限定されてくるなど、如上の土器群の実相からも賛同できる所見である。

3. 小 考

まず、G. シーヴィキングによる遺物報告の結語にあたる内容は次の

ようである。

グアチャ遺跡の報文で記されたような「新石器時代前期」に相当する証跡は、簡素・発展双方の様式をもった土器は存在するものの、これら収集土器には全く認められない。テンクレンブ遺跡のマラヤ先史集団は、半島内他所で行なわれたそれとは直接的には類似しない、極めて標準化されたデザインを具えた土器の地域様式を発展させたと思われる。この地域様式は縄目文土器の展開における盛期を示唆しているとみられ、その事は発展形態である鳥嘴状石斧との共存によって確かであるかもしれない。科学的に記録される発掘調査に欠けたため、遺物の年代や共伴に関して明確な決定に到達するのは不可能である [Sieveking 1962 : 28]。

ここで和書での言及にふれると、「石器文化の宝庫を探る（東南アジア）」では、新石器時代のマラヤの件においてテンクレンブ遺跡も採り上げ、ことに台付鉢^{*6}（TL⑥型）や日本の弥生式土器にみるのとまったく同様の器台（⑦型）を特徴的なものとして挙げている [小林 1970 : 176-77]。

また近年刊行の『東南アジアの考古学』では「土器のはじまりと農耕への道」の件でテンクレンブ遺跡にもふれ、チューリップ形の土器（鐘形深鉢TL⑧型と推察＝筆者）や高坏（⑥型）、器台（⑦型）など半島マレーシア北部における類似土器の存在に注目している [新田 1998 : 71]。

一方、近年における海外の指摘をみると、P. ベルウッド著“インド＝マレーシア群島の先史学”（改訂版）では出土標品の挿図を交えて言及されている。すなわち、テンクレンブ岩陰の土器はグアチャ遺跡と同じ規格構造・製作を有している。しかし、見たところこの地域特有な形態として高開脚付ビーカー（TL⑥型）や平底の鐘形深鉢（⑧型・⑨型）が含まれる。そして、当遺跡の遺物組成（アセンブリッジ）はグアチャ遺跡より時期的に遅れるように思われる、と説く。

また搬入土器については、およそ紀元前200年～後200年頃の南インドの形態を有していると捉え、アリカメデュ遺跡等の特定型式に類例を見出した前記B. ブロンソンの卓見を紹介している。ただ、在地組成との正確な共伴関係については留保している [Bellwood 1997 : 262]。

テンクレンプ遺跡はグアチャ遺跡と直線距離にして220km弱離れている。両者のあいだには標高1500m余に達する半島主山脈が走り、至近の内陸河川を通じて開ける海洋世界もアンダマン海と南シナ海という風に異なっている。しかしながら、上記G. シーヴィキングが説く別個の「地域様式」を発展させるほど、その背景にある生態環境や生業形態に相違があったとは考えにくく、むしろ年代上の先後として捉えることが適当であるように思われる。

そこで、比較検討した結果、グアチャ遺跡の土器組成のなかに類例を見出したり、祖形や系譜を辿ったりすることができる類型が多いという実相が浮かび上がってきた。先に2節(2)で記したように報文では「加えてまったく新しい6つの類型が認識された」[Sieveking 1962: 27]としているが、明確に新たな類型とみなされるのは、TL⑨型=TL 2種(円筒形の胴部をもつ鐘形深鉢)およびTL 3種(広口鉢)にとどまる。ほかのTL②型~⑥型・⑧型は一連の組列に組み込まれる発展した類型と捉えたい。したがって、テンクレンプ遺跡はグアチャ遺跡に年代上近接しながらもより後出であると考えられる。

ただ、TL⑧型・⑨型のような平底の鐘形深鉢が日常生活で普及してきた事は(計25点の出土)、食生活の発展・安定の証とみられよう。また、TL⑥型=台付鉢(図6)は端整な形態を具えるが、多数(10点)出土しているうえ、グアチャ遺跡のGC 1種1類a, b(高坏)とは異なって丹塗りが施されていないので、やはり日常容器と目される。あるいは、熱効率を良くして米やヤマイモを煮沸した器であろうか。

4. おわりに

マラヤ新石器時代の土器については、最も好適な報告資料とされるグアチャ遺跡を先に検討しており[川名 2006]、本稿はそれにつながるものである。

註

* 1) アリカメデュ遺跡の類例は*Ancient India* 2: 17-25, 1946、ゲディゲ遺跡

の類例は*Ancient Ceylon* 2 : 48-169, 1972 にそれぞれ収載。

- * 2) ケラントアン州に所在する中石器～新石器時代の壮大な岩陰遺跡で、1954年に本調査が実施された。
[Sieveking 1956]・[川名 2006]
- * 3) ペラ州に所在する中石器～新石器時代の岩陰遺跡で、1926～27年に本調査が実施され、概要が報告されている。文化層は7枚にわたり、厚さ4 m余に及ぶ。
[Callenfels & Evans 1928]
- * 4) 旧稿 [川名 1986] での試算では、伸展葬1基につき副葬土器は平均4.1個体という値を得た。これを適用すると埋葬数はやや増え23基前後になる。
- * 5) グアチャ遺跡3種jについて、模式図 [Peacock 1959: 130 Fig. 2 (j)、川名 2006: 図4 (j)] では丸底風に描出されているが、その標品である2号墓土器の実測図 [Sieveking 1956: Fig. 8-No. 6] では、平底を呈していることが分かる。
- * 6) [小林 1970: 176] 所載の台付鉢の図は、[Tweedie 1965: Fig. 14] の転載とみられる。「ケンデンレンブー出土」は「テンクレンブー出土」の誤植であろう。

参考文献

- 川名広文 1986 「マラヤ新石器時代の岩陰墓」『史境』13 歴史人類学会(筑波大学) 83～95頁
- 川名広文 2006 「マラヤ・グアチャ遺跡新石器時代の土器」比較文化論叢17(札幌大学文化学部紀要) 1～24頁
- 小林知生 1970 「石器文化の宝庫を探る(東南アジア)」『半島と大洋の遺跡』—沈黙の世界史10 新潮社 113～197頁
- 新田栄治 1998 『東南アジアの考古学』(共著)—世界の考古学⑧ 同成社
- Bellwood, P. 1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago* (Revised ed.). University of Hawaii Press, Honolulu.
- Bronson, B. 1979 The late prehistory and early history of central Thailand with special reference to Chansen. In R. B. Smith & W. Watson (eds.), *Early South East Asia* : 315-36. Oxford Univ. Press.
- Callenfels, P. V. van Stein & Evans, I. H. N. 1928 Report on cave excavations in Perak. *Journal of the Federated Malay States Museums* 12(6) : 145-59.
- Peacock, B. A. V. 1959 A short description of Malayan prehistoric pottery. *Asian perspectives* 3(2) : 121-56.(刊行1961)
- Sieveking, G. de G. 1956 Excavation at Gua Cha, Kelantan, 1954, Part I. *Federation*

Museums Journal I・II : 75-138.

Sieveking, G. de G. 1962 The prehistoric cemetery at Bukit Tengku Lembu, Perlis.
Federation Museums Journal 7 : 25-54, Kuala Lumpur.

Tweedie, M. W. F 1955 *Prehistoric Malaya*. Background to Malaya Series No. 6 (3 rd
ed. 1965/1970), Eastern Universities Press, Singapore.

Williams-Hunt, P. D. R. 1952 Recent archaeological discoveries in Malaya (1951).
Journal of the Federated Malay States Museums 25(1) : 181-90.

挿図典拠

- 図 1 Adi Taha 1985 : p. 7 Map 1 を転載・加筆
- 図 2 Sieveking 1962 : Fig. 1, 2 より転載
- 図 3 Sieveking 1962 : Fig. 3, 4, 5, 7, 11, 15, 18より転載し構成
- 図 4 Peacock 1959 : Fig.14を転載・加筆
- 図 5 Peacock 1959 : Fig.15を転載・加筆
- 図 6 Peacock 1959 : Fig.13、Sieveking 1962 : Fig. 9～11より転載し構成